

患者が変われば 医療が変わる 医療が変われば 地域が変わる



島根益田がんケアサロン 代表
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの㈱フジキン総務部部长兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、1ターンで益田市移住。益田ドライビングスクール合宿型システム作りを依頼される(ガイアの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

第42回 がん教育の行方

昨年来、がん教育の重要性が盛んに謳われたしている。がんに罹って20数年。がんサロンをスタートさせたのが2005年。二人に一人ががんに罹っている時代に、何を教えたらいいのか。今更がん検診やがん予防の話でもあるまい。ならば

その人自身 見る目養って

「生き方支援」の話でもしたらどうだろうか。2025年問題を控え、超高齢社会は益々進展しているのに、それを助成する「生き方支援条列」すらない。安心して看取りが出来る特別休暇もない。

数年前から近くにある石見高等看護学院3年生全員のがんサロン見学を受けている。益田赤十字病院での実習も兼ねているため、春から秋にかけて40名を10回ほどに分けて見学を行っている。最初は「患者が望む看護師とは」といった話しが中心だったが、最近は新しい手法を試している。認知症ケアのユマニチュード、精神疾患ケアのオーブンダイアログなど。がんサロンで話題にしてもおかしくはない。患者支援にはこれも役に立つ。

〇先生が出版された「死を前にした人にあなたは何が出来ますか？」という書籍を読んで、そのなかの一節「支えを見つめる9つの視点」が目に付いた。そこで先日、見学の学生たちに問い掛けてみた。がんサロンに参加している患者さんたちとはもちろん初対面なのだが、「支えを見つめる9つの視点」のいくつかを使って、指名された患者から7分以内に患者治療情報をはじめその人に関する情報を聞き出すことに挑戦してもらった。普通実習中は患者のカルテをみた上で対応するため、情報を引き出すことは非常に難しい。入院中の患者治療情報は歴が主であるが、私たち患者は人としてその自身をみてほしいのだ。

何処まで出来るか不安があったが、意外に素早く対応してくれたのには驚いた。簡単に会話をしている。そのあと学生、患者双方から感想を聞いてみた。立場は違えどこれまで自己反省をする場が少ないことが分り、大いに効果があったようだ。患者として長く生かされて来て、何か役に立つことをしなければと思ったとき、看護学生とかかわれたことは本当にラッキーだった。